

新規則解説

ルール委員会

1997年規則以来10年ぶりにブリッジの規則が改正され、J C B Lでは2008年4月26日（土）から新しい規則に移行する予定です。そこで主として新規則でプレイヤーに直接関係する改正点を解説します。新規則の日本語版は3月中旬に発行の予定で、連盟ウェブサイト（http://www.jcbl.or.jp/members/member_04.html）にドラフトが掲載されていますのでご参照下さい。

改正の概略

- ◎本質的な問題ではありませんが、表題が「デュプリケートコントラクトブリッジの規則」から「コントラクト」が抜けて「デュプリケートブリッジの規則」に変わりました。
- ◎前書の「この規則は正しい手順を定め、正しい手順から逸脱したときは十分な補償を与えることを目的としている。この規則は違反行為に対する処罰ではなく、非反則者がさもなくば損害を被るであろう状況を修正することを目的としている。」という規則の目的に沿って旧規則で使われていた「ペナルティ」は、「手順上のペナルティ」、「規律罰則」および「ペナルティカード」を除いてすべて「調整(Rectification)」に置き換えられました。
- ◎旧規則で問題の多かった第25条B項（コールの言い直し）、27条（不十分なビット）が大幅に変更されました。
- ◎「主催団体」が「管轄団体」と改称され、コンベンションやトリートメントについて全面的に規制する権限が与えられました。
- ◎ディフェンダー間でリボークの可能性について尋ねることができるようになりました。またリボークの「調整（ペナルティ）」が旧規則より軽くなりました。

主な変更点

- カードの管理（第7条）

プレイ終了後ハンドはシャフルしてボードに戻すことが明記されました。
- 違反行為の指摘（第9条）

トリックの勝ち負けの向きが間違っているときは誰でも指摘することができるようになりました（第65条B項）。ただし、ディクレアラーはいつでも指摘できますが、ダミーとディフェンダーは次のトリックのリードが出ると指摘できなくなります。プレイ中はダミーも含め誰でも違反行為が起こりそうになったとき（例えば誰かが自分の番でないのにリードしようとしたときなど）これを防ぐ行動（注意する等）を行うことができます。

また、97年規則では違反行為が指摘された後、ディレクターを呼ぶことは「義務—ねばならない」でしたが、新規則では「呼ぶようにする」となり義務は軽くなりました（ただし、呼ぶことを義務づけている条項もあることに注意）。
- 調整スコア（第12条）

J C B Lでは旧規則で、非反則側には「反則行為がなかったときに起こりそうな最も有利な結果」、反則側には「考えられる最も不利な結果」を調整スコアとして与えてきました。例えば、非反則側が相手の間違った説明のためにスラム（6♥）をビッドできなかつたと主張した場合、正しい説明でもスラムをビッドできる可能性が30%。そこそこなら非反則側には4♥6メイク（起こりそうな最も有利な結果）、反則側には6♥6メイク（考えられる最も不利な結果）のスコアという両者に別々のスプリットスコアを与えることもありました。新規則にもこの規定はありますが、旧規則では基本的に上告委員会だけが裁定することができた「加重平均」が導入されました。

マッチポイントのペア戦で先の30%ビッドできる可能性のある6♥を例に運用を簡単に説明します：

$$\begin{aligned} 30 \text{点} (6 \heartsuit 6 \text{ メークのマッチポイント}) \times 30\% &= 9.0 \text{点} \\ 15 \text{点} (4 \heartsuit 6 \text{ メークのマッチポイント}) \times 70\% &= \underline{10.5 \text{点}} \\ \text{合計} &= \underline{19.5 \text{点}} \end{aligned}$$

「加重平均」を適用することで非反側側と反側側の双方により納得できる公平な調整スコアを与えていることがわかりいただけると思います。

○正当な情報と不当な情報（第16条）

プレイヤーはどのような情報を利用できるか（正当な情報）あるいは利用できないか（不当な情報）が新規則ではより明確に規定されていますのでぜひ一度目を通すことをお勧めします。

○オークション期間の開始（第17条）

オークション期間の開始は旧規則では「ハンドを見たとき」でしたが、新規則では「ボードからハンドを取り出したとき」に変わりました。ボードからカードを取り出し、ハンドを見る前に表が見えたカードは、これまでは不当な情報として扱いましたが、新規則では第24条（プレイ期間より前に見せたり、リードされたカード）の適用を受けます。

○ビッド終了後の手順（第22条）

オークションの終了（最後のビッドの後パスが3回連続する）とオークション期間の終了（オープニングリードが表向きになる）との合間の時間は新たに「説明期間」と定義されました。オークション期間が開始されてからプレイが終了するまで自分のシステムカード（コンベンションカードという用語はなくなりシステムカードになりました）を参照することはできませんが、ディクレアラ側側のプレイヤーはこの説明期間の間に自分のシステムカードを見ることができます（第40条B項2(b)）。

○コールの言い直し（第25条）

- ・考えていたこととは違うコールの言い直し

を認める第25条A項は、新規則では「不注意な(inadvertent)」が「意図しない(unintended)」に変わりましたが本質的に旧規則と同じです。

- ・複雑で評判の悪かった、旧規則の意識的な言い直しは全面的に書き直されました。新規則でも旧規則と同様、左手の対戦相手は言い直したコールを認めることができます。この場合言い直したコールが成立してオークションは続きます。左手の対戦相手が受け入れないと、言い直したコールは取り消され、最初のコールが成立してオークションは続きます。第25条で言い直したコールが受け入れられたか否かを問わず、取り消されたコールから得られる情報は非反側側は利用できる情報ですが、反側側は利用することはできません。

○不十分なビッド（第27条）

不十分なビッドには重要で大幅な変更があります。条文を掲載したいところですがスペースがないためウェブサイトを参照していただき、要点のみ説明します：

- 1) 左手の対戦相手は旧規則と同様、不十分なビッドを受け入れることができます。
- 2) 受け入れられなかった場合、反側者が最も低い代のビッド、ダブルまたはパスに言い直し、この言い直したコールに取り消した不十分なビッドが伝える情報が含まれているときはオークションは修正（ペナルティ）なしで進行します。旧規則の不十分なビッドも言い直したビッドも「コンベンション」か否かは新規則では関係ありません。いくつか例を挙げてみましょう：

(例1) 1♦ - (1♠) - 1♥

旧規則ではパートナーが修正（ペナルティ）なしでオークションを続けることができるのは2♥へ言い直すことだけでした（最も低い代の同じスートに言い直し、かつ1♥も2♥もコンベンションではない）。新規則では「不十分なビッドに含まれていた情報が組み込まれている、最も低い合法的なレベルのビッドあるいは

ダブルまたはパスにより言い換えられた場合」はオークションは継続します。従って、例1のシーケンスで、パートナーシップが**必ず4枚以上のハートを保証するネガティブダブル**を使用している場合、不十分な1♥をダブルに替えてもパートナーは制約を受けることなくオークションを続けることができます。この場合ネガティブダブルはハートの他に不十分な1♥にはなかったマイナーを持っているという情報も含んでいますがこれは構わないと解釈されています。つまり最も低い代で言い直したコールが不十分なビッドが伝えた情報をすべて含んでいればオークションは普通に進行します。また、今回のケースでは2♥に直した場合もこれまでと同様にオークションの制限はありません。

(例2) 1NT-(2♠)-2♦*

*ハートへのトランスファー

不十分な2♦を3♥に言い直せばオークションは普通に進行します。最も低いレベルで「同じスートに言い直すか」ではなく、「同じ意味を伝えるコールに言い直すか」がオークションに制約が付くか付かないかのポイントです。

(例3) 4NT*-(5♠)-5♦**

*RKCB **0/3キーカード

ここで不十分な5♦を「パス」に言い直しても、パスが0/3のキーカードを示す約束ならオークションは普通に続きます。

(例4) 2♣*-(2♠)-2♦**

*ストロング **5HCP以下

不十分な2♦を「パス」に言い直しても、このパスが2♦が伝える情報をすべて含んでいればオークションにそのまま継続します。

また、このような不十分なビッドの言い直しは「不当な情報(利用できない情報)」ではなく「正当な情報(利用してよい情報)」で第16条(不当な情報)は適用されませんが、この不当な情報が

なければコントラクトが違った可能性がある」とディレクターが判断したときはスコアを調整することがあります。

3) 前項の2に当てはまらないコールに言い直したときは旧規則と同様、パートナーは最後までパスしなければなりません。不十分なビッドをダブルやリダブルに言い直すことはできず、パスに言い直してパートナーは最後までパスしなければならないことも旧規則と同じです。

4) ディレクターが呼ばれる前に不十分なコールを言い直すと(早まった言い直し)、左手の対戦相手はこれを受け入れることができます(旧規則では言い直したコールはすべて取り消され、左手の対戦相手に受け入れる権利はなかった)。受け入れなかったときは言い直したコールが成立し、このコールが2)の説明に当てはまればオークションは普通に進行し、当てはまらなければ反則者のパートナーは最後までパスしなければなりません。

○パートナー間の了解事項(第40条)

新規則では「管轄団体(日本ではJCB L)」にコンベンションやトリートメントを規制する権限をほぼ無制限に認めています。毎年発行される「JCB Lハンドブック」に記載されているJCB Lコンベンションリストをチェックして下さい。

規則では対戦相手のシステムカードをオークションの開始前、説明期間の間、自分のコールまたはプレイする番の時に参照することができますが、JCB Lではオークション中はいつでも対戦相手のシステムカードを参照することができるようになりました。ただしパートナーに不当な情報が伝わらないようご注意ください。

○ディクレアラーの順番外のリード(第55条)

ディクレアラーが間違ったハンドからリードしたときは、ディフェンダーのどちらも受け入れる/受け入れないの選択権がありますが、二人の選択が違うときは(間違っ

たハンドの) 次の順番のディフェンダーに優先権があります(今までは早い者勝ち)。

○リボーク(第61条-64条)

- ・新規則ではダミーはディフェンダーにリボークの可能性について質問できません(第61B項2(b))。しかし、ディフェンダーはパートナーにリボークの可能性について質問できるようになりました。ただし規則にも書かれていますが、質問することでパートナーに不当な情報が伝わる可能性があります。不当な情報が伝わらないようにご注意ください(第61条B項3)。

表にすると次のとおりです:

質問する相手 質問する人	ディクレアラ	ディフェンダー
ディクレアラ	X	○
ディフェンダー	○	○
ダミー	○	×

○質問してもよい

×質問してはならない

- ・リボークの修正(ペナルティ)は次のように旧規則より軽くなりました:

イ. リボークしたプレイヤーがリボークの起きたトリックを勝った時:

そのトリックとその後反側側が取ったトリックがあればその内1トリックの最大2トリック。

ロ. リボークしたプレイヤーはリボークの起きたトリックを勝たなかった時:

その後取ったトリックがあればその内1トリック(最大1トリック)。

- ・新規則では、同じボードで両サイドがリボークすると修正(ペナルティ)はないという規定が追加されました(第64条B項7)。

○過不足のあるトリック(第67条)

- ・双方が次のトリックにプレイした後、それまでのトリックにカードをプレイしなかったことが判明した場合、ハンドにそのトリックにリードされたスーツがあれ

ばそのカードを、なければ任意のカードを1枚選んで、プレイしたカードの中に正しく置くようにしますが、リードされたスーツがあってもなくても、そのトリックにリボークしたものとみなされ、1トリック移行させる損失の対象になります(旧規則では、同じスーツがある場合はリボークとはみなされませんでした)。

○「取り」と「取られ」の宣言(第68-71条)

- ・旧規則の「黙認」はなくなり、「同意」になりました(第68条)。また、旧規則と同様プレイは終了しますが、実際プレイされた場合、第70条D項でディレクターは宣言の正しさの「証拠」として裁定の際考慮の対象にすることができます(旧規則ではディレクターは「なかった」と考えて宣言時の説明だけに基いて裁定)。

【参考文献】

Ecats Bridge 2007年版デュプリケートブリッジの規則:

<http://www.ecatsbridge.com/documents/2007laws.asp>

Bridgetalk - Laws and Rulings:

<http://forums.bridgetalk.com/index.php?showforum=3>

Bridge Laws Mailing List (BLML):

<http://www.amsterdamned.org/mailman/listinfo/blml>

【事務局より】

J C B L ホームページにブリッジの規則に関する質問と回答のページを作成する予定です。皆様の規則に関するご質問を手紙、FAXまたはEメールでJ C B L事務局までお寄せください。